

学位請求論文審査報告要旨

2020年6月10日

申請者 藤原未雪

論文題目 上級日本語学習者の理解困難点に見られるテキスト解釈過程の研究

論文審査委員 石黒 圭
庵 功雄
山崎 誠

1. 本論文の内容と構成

日本語学習者は頭のなかで日本語の文章をどのように理解しているのか。文章理解という目に見えない過程を可視化するのに、これまで研究者は苦心してきた。本論文は、文章理解の困難点を日本語学習者の母語による翻訳や質問を用いて丁寧に読み取り、読解のさいにどのような誤解が起きているのかを丹念に記述した労作である。また、従来の文章理解研究では、説明文や意見文、論文などの論説文を扱ったものが多いが、本論文ではそうした論説文にくわえ、短編小説を扱った点でも独創的な研究であり、これからの読解研究に新たな示唆を与えうるものとなっている。

本論文は、3部17章からなる。その構成は以下の通りである。

目次

第一部 概要と調査方法

第1章 序論

- 1.1. はじめに
- 1.2. 本研究で扱う課題
- 1.3. 論文の構成

第2章 文章理解

- 2.1. 先行研究に見る文章理解の考え方
- 2.2. 本論文における文章理解の考え方
- 2.3. 読解における第二言語学習者の特徴

第3章 語義の解釈と誤読に関する先行研究

- 3.1. 語義の解釈に関する先行研究
- 3.2. 文法の把握に関する先行研究
- 3.3. 誤読に関する先行研究
- 3.4. 先行研究と本論文とのちがい

第4章 テクストのジャンル特性

- 4.1. 読みに影響する要因としてのジャンルの位置づけ
- 4.2. 説明文と物語文の違い
- 4.3. 小説と物語の違い
- 4.4. 視点
- 4.5. 学術論文と小説のテキスト特性
- 4.6. 小説の解釈
- 4.7. 解釈の多様性と正しい読みの関係

第5章 本研究で重要となる用語の定義

- 5.1. 文章理解
- 5.2. テキスト理解を決定する要因
- 5.3. 「正しい解釈」と「誤読」
- 5.4. 本研究ではミクロな理解を扱う
- 5.5. 「解釈」と「理解」という用語の使い分け

第6章 研究方法

- 6.1. 発話思考法の理論的枠組み
- 6.2. 本研究の調査手法
- 6.3. 調査の概要

第二部 学術論文の読解に関する研究

第7章 名詞の意味の誤った理解

- 7.1. 研究の目的
- 7.2. 調査方法
- 7.3. 先行研究
- 7.4. 名詞の意味の誤った理解
- 7.5. 読解力をつけるために
- 7.6. まとめ

第8章 1人の読みに注目した語義の解釈過程

- 8.1. 研究の目的
- 8.2. 読解における語義の解釈とは
- 8.3. 調査
- 8.4. 読解における語義の解釈過程
- 8.5. 考察
- 8.6. まとめ

第三部 小説テキストの読解に関する研究

第9章 材料文の分析

- 9.1. 材料文のテキストの基本情報

9.2. 英・韓・中の小説の談話構成の違い

9.3. 英・韓・中のテキストの対照

第10章 パイロット研究—中国人大学院生4人の調査—

10.1. はじめに

10.2. 調査概要

10.3. 調査で使った小説

10.4. 学習者の誤読

10.5. 2編の内容を統合した結末の理解

10.6. まとめ

第11章 日本語母語話者の小説テキストの読解

11.1. はじめに

11.2. 研究方法の枠組み

11.3. 関連性理論に基づいた解釈の手順

11.4. 調査概要

11.5. 調査結果

11.6. まとめ

第12章 日本語学習者の小説テキストの読解

12.1. 協力者の基本データ

12.2. 英語・韓国語・中国語母語話者の誤読の概要

12.3. 調査結果の一覧

第13章 誤った語義の解釈と文脈との整合性

13.1. はじめに

13.2. 調査の概要

13.3. 誤った語義解釈と文脈との整合性

13.4. 誤った語義解釈と文脈との整合性誤った語義解釈をつくる要因

13.5. 漢字の字形認識における誤り

13.6. 音韻情報の使用における誤り

13.7. 語の構成要素の分析における誤り

13.8. 多義的な表現の解釈における誤り

13.9. まとめ

第14章 登場人物を指示する要素の読み誤り

14.1. はじめに

14.2. 調査概要

14.3. 日本語の小説の談話構成と指示

14.4. 結果と考察

14.5. まとめ

第 15 章 定量的な分析

- 15.1. 母語別の誤読の特徴
- 15.2. 結末の理解と誤読数の関係
- 15.3. 文法の誤読数と語義の誤読数
- 15.4. 小説の読書習慣と辞書使用回数との関係

第 16 章 日本語学習者の動的な読解過程

- 16.1. 小説の読み始めから終わりまでの読解過程
- 16.2. 解釈の修正
- 16.3. 正しい理解に修正される過程
- 16.4. 誤読の連鎖
- 16.5. フォローアップインタビュー

第 17 章 総合考察

- 17.1. 本研究の結論
- 17.2. 学習者の母語別に見た小説テキスト読解の特徴
- 17.3. 本研究の意義
- 17.4. 読解教育への示唆
- 17.5. 本研究の限界と今後の課題

本論文のもとになった既発表論文

参考文献

付録資料

2. 本論文の概要

本論文は、上級日本語学習者の理解困難点に見られるテキスト解釈過程について明らかにすることを目的としたものである。

研究で用いられている材料文は学術論文と短編小説である。全体の手順として、まず、読み手に誤解をあたえないように正確さをもって書かれる文章である学術論文を使って学習者の読解過程を調査し、その理解困難点や語義の解釈過程を把握したうえで、その知見を発展させて、人物、場面、感情がからむ文章である小説を使って調査している。学術論文を使った調査では中国語母語話者 15 名、短編小説を使った調査では英語母語話者、韓国語母語話者、中国語母語話者それぞれ 13 名、計 39 名と、日本人大学生 17 名の協力を得ている。

調査方法は、協力者に材料文を読みながら母語で口頭翻訳をしてもらい、理解した内容や困難点などを語ってもらうものである。また、調査者からの質問にも答えてもらっている。日本人大学生の場合には、口頭での翻訳がない以外は日本語学習者と同様である。

本研究で扱っている課題は次の四つとなる。

- (1) テキスト中の語義の解釈はどのようになされ、それがテキストや読み手の母語とどのような関係があるか。
- (2) テキストの読解で見られる誤読にはどのようなものがあり、それがテキストや読み手の母語とどのような関係があるか。
- (3) 読み手特性と誤読の間に定量的な関係が見られるか。
- (4) 上級日本語学習者と日本語母語話者の読解過程を比較して、共通の特徴や学習者独自の特徴があるか。また、うまく読める人と誤読する人の読み方に違いはあるか。

第一部は、概要と調査方法についてまとめている。

第1章では、本研究の学際的位置づけについて述べており、テキスト理解を決定する要因の全体像を示し、本研究ではこれらを立体的に考えるアプローチを試みることを論じている。

第2章では、文章理解についての先行研究を概観し、本研究における文章理解の考え方を提示している。本研究で主に扱う文章理解はミクロな理解であり、ミクロな理解を、語や文の意味の解釈、指示対象の特定といった言語形式の理解であると限定している。また、本研究でミクロな理解を扱う意義は、第二言語の読解教育支援に研究の知見を生かすため、学習者がテキストを読むときにどのような言語形式が理解困難になるか具体的なデータを収集するためとしている。

第3章では、本研究の課題である、第二言語読解における語義の解釈および誤読に関する先行研究を概観している。これまでの語彙の意味類推やテキスト理解の研究では、実験文は一文レベルや語句レベルであることが多く、一文を超えた理解を研究対象としたものはごく限られていた。しかし、テキスト理解を研究対象とするなら、テキストを一編すべて読んだときに、どのような解釈をするかを調査する必要があるため、本論文では、テキスト一編すべてを材料文として、そこにおける語義の解釈を明らかにするという立場が示される。

第4章では、本研究が材料文とする学術論文と小説をとりあげ、そのジャンル特性が読解にどのような影響を与えるかを論じている。また、小説でしばしば議論となる、解釈の多様性と正しい読みの関係についての諸見解をまとめたうえで、本論文の立場として、「言語形式に基づく論理的な解釈でなければならない」「解釈が妥当であるかどうかを「正しさ」に求めるのではなくて、周辺の記述や他の部分の記述との「整合性」だけに求める」ことを示している。

第5章では、本研究で重要となる用語の定義を明確にしている。定義しているのは、文章理解、テキスト理解を決定する要因、「正しい解釈」と「誤読」、本研究で扱うミクロな理解、「解釈」と「理解」の使い分けである。

第6章では、読み手の文章理解の過程を可視化するために本研究で採用した調査方法について述べている。本研究では、学習者がテキストを読んで理解した内容を収集するため

に発話思考法を基本とし、調査者からも質問する方法をとっている。協力者と材料文についても言及されている。

第二部は、学術論文の読解過程に焦点をあてて論じている。いずれも中国語を母語とする大学院生を対象とした研究である。

第7章では、学術論文の読解における名詞の解釈について論じ、外来語の多義語の問題に加え、固有名詞を普通名詞と取り違える誤読を指摘している。

第8章では、個別の読みに注目し、学術論文の読解における語義の解釈過程について論じている。「レコード」「ソフト」といった外来語が多義語であるがゆえに、当該の文脈との擦り合わせがうまくいかず、誤読が生じた例を記述している。

第三部は、小説テキストの読解に関する調査結果を総合的に論じている。

第9章では、本研究で用いた材料文を分析し、材料文の基本情報を示している。また、英語・韓国語・中国語と日本語の談話構成について先行研究を概観したうえで、英語・韓国語・中国語の翻訳テキストと日本語テキストを対照することにより学習者の母語別の読解上の困難点を予測し、その知見を調査デザインに反映させている。

第10章では、第三部で論じる小説テキストの読解に関する研究の基礎となったパイロット研究を行っている。中国語母語話者4名の読解過程を調査し、小説テキストのどのような箇所が理解困難点となり、また、どのような誤読が見られたかを明らかにしている。また、このパイロット研究で得られた知見と第9章で分析した英・韓・中の翻訳テキストの対照結果を参考にして、テキストのどのような箇所で学習者に質問をするかを決め、本章の調査で得られた知見を調査デザインに反映させたことが示される。

第11章では、日本語母語話者の読解過程について調査している。日本人大学生17名に小説を読んでもらいながら、語句や文の意味をどのように解釈し、その際にどのような手がかりを使ったかについて語ってもらう調査を行い、その結果、「ミモザ」「三枚目」「たった一つきり」の語義において解釈のズレがあったことが示されている。また、語用論の観点から考察したところ、文章理解の入口段階において語句や文の意味を解釈する際に、関連性の原理に基づいた推論メカニズムが働く限り、解釈のズレは避けられないことが明らかとなり、日本語母語話者であっても、筆者の意図と異なった解釈になるという「ぶれ」が出てくるとしている。

第12章では、英語・韓国語・中国語母語話者それぞれ13名、合計39名を対象に行った小説テキストの読解の調査結果について、その全体像を簡潔に述べている。また、協力者の基本データ（JLPTの取得級、SPOT90の点数、小説の読書習慣、辞書を使った回数、自己申請の理解度、結末の理解の正誤）と母語別に誤読の概要を示している。

第13章では、日本語学習者の読解で見られた誤読のうち、語義の解釈に焦点をあてて考察している。具体的には、誤った語義の解釈と文脈との整合性について論じている。学習者は様々な要因から誤った語義の解釈をする。その要因とは、漢字の字形認識の誤り、音韻情報の使用による誤り、語の構成要素の分析による誤り、多義的な表現の解釈におけ

る誤りであり、これには母語別の特徴も見られる。また、誤った語義の解釈について、文脈との整合性を見てみると、ほとんどの語義解釈がすべての文脈、または部分的に文脈と整合性を持つことが明らかになったとしている。

第14章では、日本語学習者の文脈理解に焦点をあてて考察している。具体的には、小説テキストの読解において文脈理解の指標となる登場人物を指示する要素について、日本語学習者が適切に理解しているかどうかを調査している。文脈理解の指標として、文中に明示されている人称詞をはじめ、文中に非明示となっている発話主、ゼロ代名詞、ノ格名詞句といった結束性をもたらす言語形式を用いている。調査の結果、韓国語母語話者は英語母語話者と中国語母語話者に比べて、誤読が少なかったことが示され、その理由として、日本語と韓国語の言語の類似性が示唆されている。

第15章では、調査データを定量的に分析し、母語別の誤読の特徴や、文法に関する誤読と語義に関する誤読、SPOT90で測定された協力者の日本語能力との関係を考察している。誤読数について英語母語話者13名、韓国語母語話者13名、中国語母語話者13名のグループにおける平均値の差を参加者間の1要因分散分析により検討した結果、次のような結果が得られたとしている。

- ①「発話主の特定の誤り」において、母語別の平均値の差が有意であり、多重比較の結果、中国語母語話者は韓国語母語話者より多い。
- ②「字形認識の誤り」において、母語別の平均値の差が有意であり、多重比較の結果、韓国語母語話者は中国語母語話者より多い。
- ③「音韻情報の使用の誤り」において、母語別の平均値の差が有意であり、多重比較の結果、韓国語母語話者は英語母語話者より多い。
- ④「語義全体の誤り」において、母語別の平均値の差が有意であり、多重比較の結果、韓国語母語話者は英語母語話者、中国語母語話者より多い。

第16章では、学習者が小説を読んだときの動的な読解過程について論じている。読み手の解釈は固定的なものではなく、テキストを読み進めるにつれて修正されるのは自然である。一時保留や読み返しもする。さらに、ある文の解釈を誤ったことで、別の文の解釈も誤るような誤読の連鎖もある。本章では、これらの動的な営みに焦点を当て、各言語2名ずつ、言語毎の特徴がよく現れていると考えられた協力者を選び、タイムラインの図(読み始めから読み終わりまでの読解過程を時間の流れに沿って追跡したもの)を作成し、解釈の修正をもたらしたきっかけや正しい理解に修正される過程、ある誤読が別の誤読を誘発したような誤読の連鎖の過程やローカルな誤読とグローバルな誤読の関係などを記述している。

第17章では、本論文の総合的な考察として、本研究の結論、学習者の母語別に見た読解の特徴、本研究の意義、読解教育への示唆、残された課題について論じている。総括として、それまでの考察を通して、第二言語読解における理解困難点や誤読について、なぜそれが起こるのか、それが起こるとどうなるのかについて明らかにしている。また、学習

者の母語別に見た小説テキスト読解の特徴について論じ、そこから、学習者の母語別の誤読からみた読解教育について提案している。そして、本研究の残された課題について触れ、稿を閉じている。

3. 本論文の成果と問題点

本論文は、日本語学習者が日本語の文章を読むとき、どのような理解困難点を抱え、それがどのように誤読につながっているのかについて、語義の理解を中心に、学習者の母語を用いてあぶりだすことを目的としたものである。その成果は、大きくは次の3点にまとめられる。

第一は、学習者の母語を用いた文章理解の姿を丹念に記述したことにより、今までにない知見を掘り起こした点である。外来語の語義の多義性による誤読や、固有名詞と認識できないことによる誤読など、通常気づかれにくい興味深い現象がいくつも指摘されている。また、文章全体の理解の過程を問うという記述姿勢を貫くことで、誤読の連鎖・修正の過程や、ローカルな誤読とグローバルな誤読の区別など、ダイナミックな分析結果が示されている点にも独創性が見られ、高く評価できる。

第二は、英語・中国語・韓国語母語話者といった母語別の比較を行ったことにより、母語による理解の違いを明らかにした点である。これまで、文章理解の誤読研究においては、学習者に共通する一般的な問題なのか、学習者の母語による個別的な問題なのかの区別が困難であった。しかし、本論文では、英語・中国語・韓国語母語話者各13名の比較を行ったことで、言語の類似性から結束性の理解を得意とする韓国語母語話者、漢字を共有することから語の字形認識に有利な中国語母語話者、文化的背景からある種の外来語の理解が正確な英語母語話者といった違いを浮き彫りにさせている。また、日本語母語話者17名も調査に加えたことで、母語話者にも共通した誤読が見られた点とする指摘も見逃せない。

第三は、調査資料として短編小説を扱い、描写を中心とした文章に特徴的に見られる、登場人物とその視点に関わる誤読の実態を明らかにした点である。論説文における誤読と比べ、小説を対象とした学習者の誤読は先行研究が少なく、その実態はまだ十分には明らかにされていない。こうしたなか、本研究では物語世界を眺める視点の解釈に学習者の困難点が存在することを指摘し、その背景には、発話主を表す人称表現の交替や省略があり、それが視点人物の同定に困難が生じさせる原因となっていることを明らかにした点で、従来の研究と一線を画している。

一方、こうした優れた点を備えた本論文にも、問題点が存在する。

第一は、頭のなかの文章理解を考えるさい、ボトムアップ処理を十全に行う構文解析モデルが人間の脳内に存在するという前提で分析が行われている点である。こうした構文解析は、1文の処理が終了し、文の構造が確定した時点で初めて行いうるものであるが、実際の文章理解では、人間は文の途中でも解析処理を行っている。もちろん、ある種の理想

状態を仮設しないと分析がしにくいという手続き上の制約はあるが、デフォルトの解釈を設定することで、人間が行っている現実の文章理解に近づける方法が検討されてもよかったのではないだろうか。

第二は、調査のさい、質問項目が研究者の調査意図によって選ばれた点である。本論文において、学習者に理解を尋ねる質問項目は、パイロット調査によって明らかになった理解困難点を参考に慎重に選ばれたものであるが、たとえば代名詞の理解を尋ねる場合、難しそうな代名詞を研究者が抽出するのではなく、すべての代名詞のなかからランダムに抽出する方法もありえたはずである。そのような機械的な手続きを採ることで、分析結果がより客観的・網羅的にできた可能性もあろう。

第三は、小説というジャンルの文章理解に、正確な理解というものをそもそも設定するのかという点である。もちろん、本論文はあくまでも、深い内容理解の前提となる表層的な語学的理解を問題にしたものであるが、表層的な語学的理解であっても、小説というジャンルにおいて、正確で限定的な理解を求めること自体、無理がある場合があるのではないか。また、読み手が誤読する背景に書き手の力量不足が存在することもあり、不正確な理解の原因を読み手にばかり求めるのが不適切な場合もありうる。

しかし、これらの問題点は、本論文の達成した高い学術的成果を損なうものではない。また、こうした問題点については著者にも十分な自覚が見られ、今後の研究のなかで改善することが期待される。

4. 結論

以上より、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えられる。

最終審査結果の要旨

論文審査委員 石黒 圭
庵 功雄
山崎 誠

2020年5月21日、学位請求論文提出者、藤原未雪氏の論文「上級日本語学習者の理解困難点に見られるテキスト解釈過程の研究」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、藤原未雪氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、藤原未雪氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。